

「開目抄」講義の真髓 御内証「久遠元初自受用身」と、結論の「人本尊開頭の書」がない！(以下赤青緑字は図斉記) 創価高校・大学4期 所沢市 図斉 修

令和8年6月25日付け聖教新聞「教学部教授補登用講座のために 第1回開目抄」と、7月1日より創価ネットで配信中の「開目抄」動画を <https://www.sokanet.jp/recommend/kyougakubukyoujyuhotouyoukouza/> を視聴し、その言質に驚きです。池田大作全集第34巻の「開目抄」講義のご本意がないからです！講義の起承転結の「起」と「結」(←私見)の真義を除外、無視です。

「起」 - 21頁、第一章 発迹顕本と「開目抄」には一「日蓮の不思議」とは、その最大のもので、竜の口の法難の時の「発迹顕本」であると拝察できます。この時、大聖人は、内証に永遠の妙法と一体になった自在の御境地である久遠元初の「自受用報身如来」の本地を顕されました。一と。22頁で一日蓮大聖人は、御自身の発迹顕本を証明されるために、また一切衆生が発迹顕本するための明鏡として御本尊を御図顕なされた。まさに大聖人は全人類の柱です。一切衆生が仏性を開いていけるのは、日蓮大聖人の発迹顕本のおかげだからです。さらに、23頁で一「日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へ贈れば長くて・怕からず・見ん人いかに・をぢぬらむ」(御書 223)「魂魄」とは発迹顕本された御内証である「久遠元初自受用身」にほかならない。(中略)この御文では法華経勸持品で三類の強敵の迫害がいかに恐ろしいものとして説かれていても、魂魄である日蓮には何も恐ろしくはないと言われているのであり、何ものも恐れぬ久遠元初自受用身の偉大な御境涯の一端を示されている一と。

(私見) 上記、池田先生の真義が動画には無く、先生のお心に反している。

「結」 - 289頁、「開目抄」全編の結論ともいふべき「末法下種の三徳」について、語っていきます。大聖人は仰せです。「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」日蓮大聖人こそが、末法の主師親の三徳を具備されていると宣言されている一節であり、本抄が「人本尊開頭の書」と言われる根拠もここにありますが - と。

(私見) 上記より、動画は竜の口の法難の時の「発迹顕本」が久遠元初の「自受用報身如来」の本地の開頭であることと、「開目抄」の結論—「人本尊開頭の書」—を無視し、画竜点睛を欠き、論述には誤りが含まれる。ゆえに、私は、池田先生の本当のご指導「開目抄」講義と「法華経の智慧」等をもって以下、動画を検証、また聖教新聞についても併せて破邪顕正します。 1/11

6月25日付け聖教新聞と動画(29分43秒~)には「教学要綱」94頁が引用です。その冒頭の以下の記述は、**池田先生の本当のご指導**にはありません。

—**大聖人は、法華經の行者という使命に立ち、釈尊から『法華經』の肝心である「南無**



妙法蓮華經」を託された地涌の菩薩であるという自覚を持って、末法は一切衆生の成仏を可能とする三大秘法を確立されたのである。一と。

(私見) 上記、聖教新聞に引用された「教学要綱」の文は、前頁で揭示申し上げた**池田先生の「開目抄」講義**の真義に違背した、**大聖人様を釈尊の下に貶める誤り**である。

また、このことについて、親友**中村誠**氏から以下、頂きました。一かつて、これは、池田先生が「誤解を招きやすい」として否定していた解釈ですが、池田先生が表に出られなくなった2010年以降、執拗に繰り返されています。以下は**池田先生の法華經の智慧**の講義です。

「**齊藤**： はい。確認しますと、法華經では、「久遠実成の仏」から「上行菩薩」へと結要付嘱されますが、その渡された法とは、「法華經二十八品」ではなく、**文底の「南無妙法蓮華經」**ということになります。

名誉会長： その通りだが、「渡された」というところが、誤解を招きやすい。**上行菩薩は本来、もともと、南無妙法蓮華經の当体です。**もともと持つておられる法であるが、末法に南無妙法蓮華經を弘めていく資格というか、立場を確かに認められているという**「証拠」を示す儀式**なのです。(法華經の智慧 5巻, p. 216)

私見： こうした「誤解を招きやすい」と池田先生が断言された内容を、2010年以降、執拗に繰り返されているとしかいいようがないでしょう。詳しくは私の著書「**釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』**を中心にした異様な書物群・2010年以前の池田名誉会長の著書との徹底比較検証」で詳しく分析しています。一と。

以下、**動画**の主要な誤りを示し、それに対し、**池田先生の著作**を引用して反証、私見を記します。

1. 11分2秒以降で—「一念三千の法門はただ法華経の本門寿量品の文の底に
しずめたり」(新54,全189)釈尊一代の教えの中でも真実の法華経、その中でも本
門寿量品の文の底に成仏の根本法である一念三千の法門が示されていることを
大聖人が明かされているのです—と。

(私見、反証)「一念三千の法門はただ法華経の本門寿量品の文の底にしずめたり」
こそ、**日蓮大聖人**が門下へ下された最重要なご垂教と思っており、日蓮仏法
の真義、奥義は全て文の底から理解していきなさいとの**ご遺言**であると拝して
おります。この文底からの解釈を、**池田先生は「開目抄」講義**で何か所
にも繰り返しご指導なのです。**先生**が「開目抄」講義の第三章を「**文底**」と銘打
たれ、以下、詳述されています。なのに、動画ではその本義を述べず、上記「**示
されている**」だけである。これでは、「**開目抄**」の本義を視聴者に伝えていない
と言わざるを得ない。

55～62頁には—日蓮大聖人は、「凡夫成仏」の鍵となる根源の法を
「一念三千の法門」と呼ばれ、それが「但法華経の本門・寿量品の**文の底**」に
秘沈されていると述べられています。「**文の底**」に秘沈されている**一念三千**と
は、「一切衆生の成仏」を掲げる法華経の真髓というべき法理で、一言で言え
ば、「凡夫成仏の大法」としての**十界互具・一念三千**であると言えます。

大聖人は、この文底仏法を説かれることによって、末法という悪世
における民衆一人一人の根源的な救済の大道を開かれたのです。(中略)大聖人
は、九界の凡夫の身を捨てずに仏界の生命を現す凡夫成仏の道、つまり事実と
して**十界互具**を実現する道を、寿量品の久遠実成の根底に**洞察**されたのです。
(56頁)(中略)

大聖人は、十界互具が事実として実現する道を「信」「祈り」「唱題」という
身・口・意の三業にわたる事行の南無妙法蓮華経」として確立して下さった
のです。そして、いわば、見えない自他の仏性への信を開くために、**御自身の
南無妙法蓮華経の生命を御本尊として顕され**、私たちの信心の明鏡としてくだ
さったのです(57頁)(中略)寿量品の**文上には凡夫成仏・十界互具が明確に説
かれているわけではない**。しかし、その「意」においては、凡夫成仏の要法が
文底に厳然と拝されるのです—と。さらに、「**文底**」の章の最後で一真の一念
三千の法門を末法に弘める者こそが末法の主師親三徳であり、**その教主とは日
蓮大聖人にほかならない**。それを明らかにしていくために、**この文底秘沈の一
節があるのです**(62頁)—と。 3/11

(私見、続き) 上記、**池田先生の文底講義**を今回の「開目抄」動画は外してはならないのです！動画は最重要の「**文底**」の章を除外、**文上解釈**に終始、それは**池田先生のご本意に添わない日蓮仏法への違背なのです。**

開目抄の「**一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり**」こそ、日蓮大聖人様の遺言であり、これを拝受、継承された日興門流、なかんずく日寛上人、そして、三代会長のご指導の根底に厳然と脈打っているのだと拝しております。そして、**動画**が、日蓮正宗を日顕宗として一括りにする誤りに対し、牧口・戸田・池田三代会長は日興門流の清流の真義を根底にされ、私たち学会員にご教示して下さいましたと拝しています。それを一番端的にご指導されたのが、池田先生の「法華経の智慧」の一**文底が説かれて仏法は完結**(全6巻中第5巻278頁、普及版下233頁)なのです。

2. 11分49秒以降で—結論として大聖人は、末法の衆生が成仏するための教えを探求され、諸経典の中から法華経を、そして法華経の肝心として**南無妙法蓮華経を選び取っていかれた**—と。

(私見、反証) この**南無妙法蓮華経を選び取っていかれた**とは、これも邪義である。正しくは、大聖人は南無妙法蓮華経を**自解仏乗**されたのです。南無妙法蓮華経を選び取ったのではないのです。この真義については、私の過日の拙文—立宗宣言の日に糺す「教学要綱」の重大な不正・邪義17
他 <https://share.google/5zCpZB8xZrHN44491> —の冒頭、2～4頁をご参考下さい。

3. 31分38秒以降で—**末法の人々が成仏する方途は、大聖人が示された「南無妙法蓮華経」の三大秘法である**—と。

(私見、反証) **動画**は**三大秘法の御本尊**とは言わない。つまり、ただ単に、法だけの強調であり、御本尊の意義は全く述べてないのです。池田先生の「開目抄」講義では、**開目抄は「人本尊開頭の書」**と何箇所も記されているのを無視なのです。**御本尊**の真義への偏見そのものである。

4. 32分09秒には—日蓮正宗(日顕宗)の教学では『御本仏』という表現には日蓮大聖人が根本の仏であり、久遠実成の釈尊もその**垂迹**、仮の姿であるという意を含んでいますが、これは**大聖人の御書には見られない解釈**です—と。

(私見、反証) 上記—これは大聖人の御書には見られない解釈—は誤りです。以下、池田先生の「百六箇抄」講義は一日蓮大聖人が根本の仏であり久遠実成の釈尊もその垂迹—の真義を、従本垂迹との解釈をもって、明確にご指導されているのです！ゆえに、動画は池田先生の本当のご指導と違背しているのです！ 一下種の今此三界の主の本迹

久遠元始の天上天下・唯我独尊は日蓮是なり、久遠は本・今日は迹なり、三世常住の日蓮は名字の利生なり—について、池田先生は、以下ご指導です。—

本抄の文は「久遠は本・今日は迹なり」と続いております。これは表題に掲げられた「下種の今此三界の主」たる日蓮大聖人の生命を「本」と「迹」とに立て分けられているところです。すなわち久遠元初の自受用報身如来が「本」であるのに対して、3000年前に出現したインド応誕の釈迦仏は「迹」であるということです。ここにおける「本」と「迹」の関係は、従本垂迹であります。つまり、インド応誕の今日の仏は、久遠元初の自受用報身如来から出生した影の仏であるということです。更にいえば、久遠元初の自受用報身如来を「体」とすれば、今日の釈迦は「用」となるのであります。否、単に、今日の釈迦のみならず、五百塵点劫本果第一番成道の釈迦をはじめ三世十方の諸仏すべてが、久遠元初の自受用報身如来の「用」の仏となるのであります—と。

(私見、続き)「御義口伝」には「末法の仏とは凡夫なり、凡夫僧なり」(1789頁)とあり、「諸法実相抄」には「釈迦・多宝というも用の仏なり(中略)仏は用の三身にして迹仏なり」(1789頁)とある。これらの御文によって、『教学要綱』が「百六箇抄」「御義口伝」「諸法実相抄」を完全に無視し排除していることが分かる。これは『教学要綱』が身延派と同様に、真筆のない御書を全面的に排除する悪しき真筆主義に立っていることを示している。

また、このことについて、中村誠氏から以下頂きました。—

池田先生は次のように講義されていた。「日蓮大聖人は、釈尊よりも百千万億倍すぐれた御本仏である。大聖人に相対すれば、迹仏である。釈尊は太陽の光に照らされて、ささやかな光を放つ、月の如き存在なのである。下山御消息には『教主釈尊より大事なる行者-日蓮』と仰せられ、諫曉八幡抄には、釈尊を月に例え、大聖人を日に例えられている。 5/11

また法蓮抄には釈尊を一劫の間、三業相応で供養する功德よりも、末法の法華經の行者を戯論に一言、あたかも継母が継子を褒めるように、心からではなくとも、賛嘆し供養する功德の方が百千万億倍すぐれていると仰せられている」(『御義口伝講義』上 p. 770) この池田先生の講義は全て誤りであるとしてもいいのだろうか。そもそもここに引用されている御書は全て真筆か古写本が残るものばかりであり、**宗門教学などではない**。具体的にこの講義のどこが宗門教学なのか？その証拠を示すべきであろう。この動画の言質は、池田先生の下山御消息講義一卷の内容を完全に矛盾するものであると言えよう。以下にその重要講義を引用しておこう。

「この(「本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし」(報恩抄, 旧版御書, p. 328)) 御文において重要なことは、「本門の教主釈尊を本尊とすべし、(中略)釈迦多宝(中略)脇士となるべし」との語が示す内容である。ここでは、釈迦・多宝の二仏が本門の釈尊の脇士となると仰せられている。したがって、**多宝と並ぶ「釈迦」とは本門の「教主釈尊」と同一ではないことが明らかである**。これをいかに解すべきかで、釈尊を本仏と立てる他門流では苦しい解釈を重ねてきた。安国院日講も録内啓蒙卷第十五の中でそれまでの解釈を列挙しつつ、結局は「祖意測り難し、故に衆義並び存して後賢の研かくに備う」と述べ、自ら正解を放棄して後世に委ねざるを得なかったのである。この問題についても、下山抄で大聖人が御自身のことを「教主釈尊より大事なる行者」と仰せられた御真意を拝すれば明瞭となるのである。すなわち、教主釈尊(多宝と並び称せられる釈尊)よりも大事なる行者である日蓮大聖人こそが「本門の教主釈尊」にほかならない。すなわち、**報恩抄に仰せの「本門の教主釈尊」とは大聖人を指し、釈迦・多宝の二仏がその「脇士」となることは明らかである。(池田大作監修・下山御消息に学ぶ1巻, p. 139)** また、「日蓮大聖人は、釈尊を根本の仏として最大限に敬い」について—

この部分は誤りであり、この動画は**教学要綱の「隠れ釈迦本佛論」**の正体を暴露しているといつてよいだろう。釈迦が根本の仏であるならば、「根本仏教主釈尊に南無し奉り、報恩感謝申し上げます」という御観念文がなければ、根本仏に対する不敬になるであろう。しかし、そのような祈りを三代の会長先生たちはしてこなかったのは明らかであり、これは五老僧門流に転落してことを意味する証拠である。池田先生は次のような講義を遺されている。「**日興上人と五老僧の根本的な相違がここにある。すなわち、日興上人は大聖人を悪世末法の衆生の闇を照らす根本の仏として仰がれた**」(池田先生の講義、2008年5月、大白蓮華700号特別寄稿, p52) —と。 6/11

5. 33分23秒以降には一**釈尊も大聖人も、根本の法である南無妙法蓮華經によって仏になったのであり、そこに、どちらが本仏か迹仏かなどといった上下関係や勝劣関係があるわけではありません。**人間に優劣を付けないことと同じです。一と。

(私見、反証) 上記は、日蓮大聖人への冒瀆以外の何ものでもない。一**釈尊も大聖人も、根本の法である南無妙法蓮華經によって仏になった** 一とはなんですか。これも、前述の2と同じく大聖人は南無妙法蓮華經を**自解仏乗**されたのです。

また、一**どちらが本仏か迹仏かなどといった上下関係や勝劣関係があるわけではありません。**一も誤りである。池田先生は「法華經の智慧」(全6巻中第4巻56～58頁、普及版中64頁)で以下ご指導です。一

過去・現在・未来のあらゆる仏は、ことごとく釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟ったのです。それが**久遠元初の自受用身であり、南無妙法蓮華經如来**です。戸田先生は言われた。「**日蓮大聖人の生命**というもの、われわれの生命というものは無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。始めもなければ終わりもないのです。大宇宙それ自体が大生命体なのです」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その**大生命体を「師」として「人間・釈尊」は人間のまま仏となった**のです。一と。

(私見、続き) 上記より**日蓮大聖人が釈尊の師**なのです。つまり、**釈尊は弟子**なのです。よって、仏法上の立て分けにおいて**主従・師弟(上下・勝劣)**があるのは当然の理です。それを「人間の優劣」と同列に論じるのは、教学の混同甚だしいと言わざるを得ません。

6. 34分47秒以降には一**宗門のように超越的存在として大聖人を神格化**するのではなく一と。

(私見、反証) この発言こそ、**動画が大聖人様**をそのように決めつけている証言です。なぜなら、日蓮正宗でそんな言葉、表現を使ったことも、読んだこともないからです。ましてや、池田先生のご指導の中で「**超越的存在として大聖人を神格化**」という酷い表現を一度も見ることがないからです。私は、以前、この酷い表現を中野毅氏のブログ <https://share.google/SbUM9oNyTDI8g9vUY> 上で読み、昨年、私の5.3拙文でブログを引用して破邪顕正しました。以下、<https://share.google/wngEOUWwkU5s7hPTW> の51～55頁をご参考下さい。 7/11

7. 34分1秒以降には一池田先生は、法華經における上行菩薩への付嘱について『生死一大事血脈抄講義』でこのように述べられています。『単なる仏から菩薩への付嘱ではなく、仏法の大転換、そして、教主の交代を意味しています。』と。

(私見、反証) 池田大作全集第24巻の『生死一大事血脈抄講義』(聖教新聞昭和五十二年四月掲載)を拝読しましたが、動画の『単なる仏から菩薩への付嘱ではなく、仏法の大転換、そして、教主の交代を意味しています。』の記述はないです。

ただ、以下、講義128～130頁には教主の交代の**本義**が記述ですが、それを動画は引用してないのです。これでは**ただの文上解釈**であると言わざるを得ません。

一「夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり 其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」

(講義) なぜ妙法蓮華經をもって「生死一大事血脈」の体とされるか。その理由の第一は、法華經の儀式において末法に流布すべき法体として説かれたのが妙法蓮華經である。そして、この付嘱を受けて末法に弘通する上行菩薩にとって、久遠本地の生命が妙法蓮華經であると仰せです。したがって、この御文は「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」が一往の教相の立場であり、「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」が再往の観心の立場という、二重の構造になっているわけであります。上行菩薩は、一往文上の辺では、法華經の虚空会で釈迦、多宝の二仏から妙法蓮華經を譲り受けるという儀式を踏みます。しかし、再往文底からみれば、上行菩薩への付嘱です。本来、妙法の大地に住し、人法体一である最も根本の仏なのであります。ゆえに「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈」なのです。無作三身如来の内に脈打っているその生命こそ、妙法蓮華經—南無妙法蓮華經にほかならないのであります—と。

また、212—213頁には一**神力、囑累の付嘱**が終わるや、十方の諸仏はみな本土に還り、多宝の塔も元へ戻って、莊嚴な虚空会の儀式は、靈山会に復帰するのであります。これだけ大変な力を入れて本化地涌、その中でも別して**上首上行への付嘱**がなされたのに、今、末法にいたって、上行菩薩の弘めるべき法を**日蓮大聖人が弘められている**。 8/11

もし、大聖人が上行ではない、全く別人だとしたら、あの**法華經の儀式**は何のためだったのかということになってしまうわけであり、多宝如来の出現も、十方諸仏の来集も、意味を失うことになってしまうのであります。そんなことがあるわけがない。

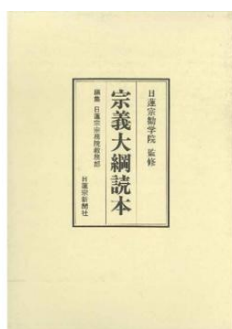
この明白な道理のうえからも、**日蓮大聖人御自身が、一往外用の辺において上行菩薩の再誕**であり、しかも内証に、おいては末法万年の闇を照らす新たな大仏法建立の仏、すなわち**久遠元初の自受用報身如来**であられることが知れるのであります一と。

(私見) 動画の**一上行菩薩への付嘱の「教主の交代を意味しています」**一は『生死一大事血脈抄講義』にはなく、動画の言質自体が不明瞭である。同講義(池田大作全集第4巻)の本意は**一日蓮大聖人御自身が上行菩薩の再誕であり、内証は久遠元初の自受用報身如来**一である。

以上で、**動画**の不正を、**池田先生の本当のご指導**から破邪顕正しました。
池田先生の「開目抄」講義 第八章 137 頁 法華の深恩には一

大聖人は、「御義口伝」において「**本尊とは法華經の行者の一身の当体**なり」と仰せです。成仏の修行の明鏡となり、指標となる本尊は法華經の行者の一身に拝することができるのです。ここに諸天の守護と法華經の行者をめぐる問題が「此の書の肝心・一期の大事」と言われるゆえんがあり、また、**「開目抄」が「人本尊開顕」の書と言われるゆえん**があるのです一と。

池田先生の「開目抄」講義は終始一貫、**御本尊について御指導**なのです。それを除外しているのが聖教新聞と動画なのです。これでは、**池田先生の本当のご指導**を拝受、反映した教学講座とは言えない！



最後に、「開目抄」(動画) と6月25日付け聖教新聞は「教学要綱」を引用しているが、「竜の口の法難についての『教学要綱』の説明が身延派日蓮宗の説明と同じであることは、実に重大な不正である。『教学要綱』は竜の口の法難で日蓮大聖人が「上行菩薩としての役割を果たす立場」(同書43頁)に立ち、「自身こそ上行菩薩の働きを行う者であるという自覚を表明された」(同書45頁)と記しているが、この理解は身延派の正式な教義書である『宗義大綱読本』(日蓮宗勸学院監修)の説明と同じだ。

身延派の『宗義大綱読本』には、「遠流と刀杖等の諸難の連続を体験された聖人は、法華経に予言された地涌上行の自覚を確立されたのである」(8頁)と記している。これまで創価学会は、日蓮大聖人は竜の口の法難で発迹顕本されて久遠元初自受用身の本地を顕されたと説明してきましたが、『教学要綱』がそれを改めて身延派と同じ解釈をしているのはなぜなのか、何故にこのような変更をしたのか、その理由を示さなければならない。その説明を拒否していること自体が『教学要綱』が邪義であることを証明している。

私は、日蓮仏法の真義と池田先生の本当のご指導を厳護するべく、池田門下生の使命と責務を胸に、『教学要綱』の即時、絶版を訴え続けます。

以上、教授補登用講座「開目抄」(動画) および関連する聖教新聞の記事について、池田大作先生の『開目抄』講義、『法華経の智慧』、『百六箇抄講義』、『生死一大事血脈抄講義』などとの比較を通して、私なりの見解を述べてきた。私自身は、池田先生の『開目抄』講義では、「発迹顕本」「文底」「人本尊開顕」などが一貫した流れの中で論じられており、それらが講義全体を理解する上で重要な柱になっていると受け止めている。

そのため、今回の講座や関連記事では、それらの論点についての説明や重点の置き方が異なっているように感じられた。また、『教学要綱』における竜の口法難の説明についても、従来私が理解してきた教学説明とは異なるように受け止めている。この点については、なぜ現在のような説明が採られているのか、その教学的な背景や考え方について、より丁寧な説明がなされることを期待している。

そして、私は、**池田先生の『開目抄』**講義に示された教学理解を重要な指針として学んできた立場から、今回の講座内容を検討したところ、いくつかの点で解釈や説明の重点に違いが見受けられるように感じたため、その理由と根拠をできる限り明らかにしたいと考え、本稿をまとめた。

本稿で述べる内容は、あくまでも私個人の教学上の理解と研究に基づく意見・論評であり、特定の個人や団体を誹謗・中傷することを目的とするものではない。**引用箇所については、それぞれの公開資料・書籍等**に基づき、その解釈や評価について私見を述べている。読者の皆様には、一つの見解としてご覧いただき、それぞれの資料本文や講義内容も併せて確認しながら、ご自身の判断の参考としていただければ幸いである。

また、私の理解に及ばない点もあると思われるため、今後も資料を読み直しながら、さらに学びを深めていきたいと考えている。本稿が『開目抄』や**池田先生の講義**について改めて考える一つの資料となり、読者それぞれが、原典や講義本文を確認しながら教学への理解を深める契機となれば幸いである。

本稿は一個人の研究・論評として執筆したものであり、異なる見解や建設的なご意見、ご指摘についても真摯に受け止め、今後の学びに生かしていきたいと考えている。

この拙文を親しき友人にお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご意見、ご指導を、kiiroibara.526@gmail.com にお問い合わせ申し上げます。敬具 岡齊修